



2018年度 関東支部
「エグゼクティブセミナー」特別講演

株式会社hapi-robot 代表取締役社長
ハウステンボス株式会社 取締役CTO

富田 直美 氏

Profile

とみた なおみ 1948年生まれ、静岡県出身。ハウステンボス取締役CTO（最高技術責任者）兼エイチ・アイ・エス取締役CIO（最高情報責任者）兼hapi-robot代表取締役社長として、H.I.Sグループ全体のロボットと先端技術事業を統括。外資系IT企業の日本法人社長など11社の経営に携わり、財団法人日本総合研究所理事、社会開発研究センター理事、アジア太平洋地域ラジコンカー協会の初代会長などを歴任。“富田考力塾”を全国的に展開し、多摩大学客員教授も務める。

AI、ロボット、IoTを社会に活かす ～人がより幸せになるような未来を創る会社の使命とは？～

経験すると、しないのでは 無限大の差がある

私は4年ほど前からハウステンボスの運営に関わり、ロボットを導入した「変なホテル」のプロデュースなどを担ってきました。本日の講演のテーマからすると、こうした経験をもとに、ロボットやAI、IoTといった先端技術を駆使してハウステンボスをV字回復させた経緯などを語るべきでしょうが、それ以上に伝えたいことがあります。それは、私が主催する「考力塾」で語っている「考える力の重要性」です。

「考える力」を磨くうえで大切なのは、頭の中だけで考えるのではなく、実際に体験すること。セグウェイに乗って登壇したり、ドローンを飛ばしたりと、ずいぶん変わった講演で皆さん驚かれたと思いますが、それは、こうした技術を皆さんに体験していただきたいからです。

セグウェイもドローンも素晴らしい技術で、すでに海外では積極的に活用されていますが、なぜか日本では自由に乗り回したり、飛ばしたりできません。私はよく「日本は“技術立国”」と言っているが、先端

技術分野における競争で海外に勝てるわけがない」などと言って反感を買っていますが、経験できないのだから勝てないのは当たり前です。

数学的に言えば、経験しないは「ゼロ」です。一度経験すれば「1」だとして、その差はどれくらいかと言うと、「 $1-0=1$ 」ではなく、「 $1\div 0=$ 無限大」。つまり、経験するか、しないかでは無限大の差があるのです。セグウェイは本当に安全なものか、ドローンにはどんな活用法があるかは、実際に経験しなければ判断できません。先端技術に限ったことではなく、あらゆる面で「考える力」を磨くうえで、まずは経験することが大切だということ、ご理解いただきたいと思います。

ものごとに参加し、考える には4つの段階がある

「考える力」について、もうひとつ大切なのが、ものごとを考えるうえでの姿勢です。今、皆さんはこの講演に参加されていますが、参加にも4つの段階があります。皆さんはどのレベルでしょう？

まずはJust Sitting、座っているだけという人。私はこういう人のた

めに話す気はありません（笑）。そこからParticipate（消極的参加）、そしてInvolve（積極的参加）とレベルアップしていきますが、できれば、もう一段上のEngage（主体的参加）まで踏み込んでもらいたい。

「主体的に参加する」という姿勢は、先端技術についてだけでなく、政治や人生について考えるうえでも大切なことです。残念ながら、日本人はこの面では非常に弱く、乱暴な言い方をすれば「コピペ」で生きているとも言えます。先端技術も欧米のコピペですし、私を含めた“団塊の世代”にありがちな「いい大学を出て、いい会社に入るのが成功」という考え方もコピペです。

皆さんは自分の人生の幸せについて、コピペではなく、主体的に考えていますか？「親が言うから」「周りがそうだから」というのではなく、自分の人生、自分の幸せは、自分で考えてもらいたいと思います。

考えるために必要な 「情報」のヒエラルキー

ここまで「考える力」を磨くために必要なことを語ってきましたが、ものごとを考えるためには何が必要

講演録

でしょうか？それを理解しやすいよう、私は20年ほど前に「情報のヒエラルキー（階層）」というものを作りました。

情報の基礎となるものが「データ」です。データとは数値の羅列のようなもので、それ自体には意味がありません。このデータの集合体に意味を持たせたものが「情報」です。様々な情報の中で、自分にとって価値があると思ったものを頭にインプットする、これが「知識」です。

知識は、ただ持っているだけでは、お金と一緒に何の意味もありません。知識を役立てるには「知恵」が必要です。知恵という字は「知識を用いて、人を恵む」、つまり幸せにするという意味です。知識は道具にすぎません。経験や人間力を活かして知恵を使い、人を幸せにする。これが大切なことであり、その究極にあるのが「愛」です（図1）。

私たちはデータや情報、そして知識を使って、人を幸せにできるかどうかを試されています。そこで私が大切にしてほしいのは、「人」と言っても「他人」ではなく、まず「自分」を幸せにするということ。自分が幸せになるために何が必要かを、一人ひとりが主体的に考えてほしい。これが私の考えです。

技術は本当に人を幸せにするのか？

なぜ、本日のテーマでこんな話をするかというと、AIやロボット、IoTといった先端技術が人を幸せにするかというと、決してそうではないと考えるからです。これらの技術によって生産性が高まる、自由な時間ができるというのは、確かにありがたいことです。しかし、果たしてそれで人が幸せになったでしょうか？

ひどい言い方になりますが、これらは人を幸せにしたのではなく、ラクにしかただけ。むしろラクになり過ぎることで、私たち自身が経験できな

くなるのが心配です。今、AIが進化して「第三世代」と言われていますが、それは「ディープラーニング（機械学習）」と言って、AIが様々なデータを認識し、自ら学んでいけるようになったからです。このディープラーニングというのは、じつは私たち人間が自然にやっていること。自動化が進んで人間が実際に経験しなくなればなるほど、こうした能力が失われかねないと懸念しています。

一方で、AIやロボットの方が効率的だからといって、人の仕事が奪われ始めているという現実があります。技術が人の仕事を奪って、人を不幸にするというのは、それは使い方が良くないということ。だから私は人をラクにするため、生産性を高めるだけのロボットは作りません。人の能力を引き出し、その引き出された能力によって幸せになる。そんなロボットを作るのが私のテーマです。

人間の幸せを考えるうえで重要な[E-TRINITY]とは？

何が幸せかは人によって異なります。ですから、人間の幸せというのは、やはり一人ひとりが考えるべきこと。ある意味では「エゴ」ですから、私はこれを「EGO-LOGY（自己）」と呼んでいます。人が幸せになるためには周囲の環境が良くなければならないので「ECO-LOGY（自然摂理）」も大切です。さらに、

環境を守るにはひとりの力では限界があるので、企業レベルでの「ECO-NOMY（環境経済）」が重要になります。

私はこの3つの「E」を調和した「E-TRINITY」という概念を掲げています。これは近年、世界中の企業に求められているESG、すなわち「Environment（環境対応）」「Social（社会責任）」「Governance（企業統治）」や、ダボス会議で採択された「SDGs（持続可能な開発目標）」の実現につながるものだと考えています。

こうしたことを考えていくうえで、やはり大切なのは、皆さん一人ひとりが実際に体験し、主体的に考えること。AIやロボット、IoTといった技術を、どのように使えば人は幸せになれるのか。ぜひ、自分のこととして考えてみてください。

▶図1 情報のヒエラルキー(階層)モデル

